

今年は、久しぶりに東京に行く機会があった。長男の就職、野田中学校の修学旅行、ちょっとした家族旅行などである。いずれも、コロナの状況をかいくぐるようにである。以前は、車でも新幹線でもスカイツリーが見えるだけで、それなりの感動があったものである。一昔前なら東京タワーである。富士山が見えたときなどは、それ以上である。

ところが、コロナの前からだから、数年前からになる。東京に行っても感動することが減ったように感じる。「こんなものか」という思いが先行する。渋谷に行ってもそうである。新宿も池袋もである。人が多いことに閉口してしまうのは変わらないのだが。

銀座に行ってもそう。皇居に行っても、さほどの思いはわいてこない。浅草に行ってもそうである。以前とは明らかに「東京」の見え方が変わってきている。きっと期待をしていないのである。東京がわるいわけではない。こちらの問題である。

日本は、北海道と沖縄を除けば、どこもそうは変わらない。近代的な街並みの中に、歴史的な建物や趣のある建造物が紛れている。街がまるごと世界遺産のようなところはない。そこが、ヨーロッパなどとは違う。旧市街と新市街のような区分けもない。それでも、海外からの観光客は、日本に来てくれる。東京がいいと言ってくれる。なぜなのだろう。

京都や奈良に行くと、さすがに違う。一つ一つのお寺や神社のスケールもその空気感も違う。たぶん、今の自分は、東京よりも寺社仏閣を望んでいるのだろう。京都に3か月いたい。そう思う。京都にいれば奈良には行ける。大阪にも近い。鎌倉にも1か月はいたい。

だからといって、東京に行きたくないわけではない。美術館や博物館などの文化面での魅力は捨てがたい。テレビに出てくるようなおいしいお店にも行ってみたい。結局は、東京にも3か月はいたい。

もはや、上京という言葉は死語なのだろうか。以前は、新幹線で東京に行き、満員電車に揺られ、目的を果たし、ようやく東京駅にたどり着く。迷わないように細心の注意を払いながらお土産を買う。そして、これまた迷わないように慎重に東北新幹線の改札口を目指す。改札を抜けると左手に広い待合室がある。席が空いている。腰を下ろす。ほっとする。明らかに、その場の空気は“北”である。それまでの空気とは違う。きっと、この待合室にいる方は、皆ほっとしているのである。

指定された新幹線の座席に座る。さらにほっとする。「これで帰ることができる」新幹線が動き出す。北に進むうちに、乗客が減っていく。新白河を過ぎる。「もうすぐか」郡山に着く。暗闇の中に郡山の街並みを確認する。福島盆地に入る。南福島からは、窓越しに見覚えのある風景に目をやる。福島駅が近づく。荷物を手にする。到着のアナウンス。うれしくはない。「帰ってきてしまったか」ホームに降り立つと、いつものことだが、寂しさがよぎる。つい2時間前まで自分がいた東京と比べてしまうのである。そして、「またがんばるか」と家路につく。

自分が住んでいる街であり、生きている街である福島の存在を際立たせるためには、東京が必要である。そう考えると、東京は、ものさしであり、基準のようなものである。東京との比較において考えると、いろいろなことが見えてくる。東京には、いつまでも元気でいてもらいたい。